

**ス**トイックエピキュリアン

# 雨のサンクチュアリ

「——今日とか、するにはばつちりじやないかなあ」

静かに澄んだアルトボイスが、耳に届いた。

午後四時五分前。夏休みも終わりに近づいた、自分たちのほかは人のいない生徒会室。

窓の外からは午前中から降り続く雨の音が、どこか物憂げに聴こえてくる。その雨音のみの静寂の中で、彼女の言葉は唐突に発されたのだった。

「……え？　するにはつて、何が？」

手元の文化祭向けの書類を音をたててめくつてみせながら、報淑中学校生徒会副会長・藍川未森は、テーブルの向こうを見た。

できるだけさりげなくあげたつもりの声だったが、かすかにうわづつてしまっているのがわかる。

未森は指で黒フレームの眼鏡を直し、その指で長いおさげ髪の片ふさをときおろした。その動作もなんだか不自然にしらじらしくなつてしまつていような気がして、

わかつていた。卓の向かいの杏樹——生徒会長・桐島杏樹が口にした言葉が、なにをさし示しているのかは。

天井の蛍光灯をつけていなかったの、半教室分の広さの生徒会室はけだるげに薄暗い。

灰白い雨空の窓を背にした杏樹は、すこし癖のある短めの

髪の後ろに指を組んだまま、笑みをこちらに向けた。

ふうん……という悪戯っぽい鼻吐息の音が聞こえてきそう  
な、眺めるような視線。

こちらがわかつていることを、わかられている。と、未森は思う。

ボーイッシュなんだけど、その言いかたより、中性的、という語彙が似つかわしい——神様が繊細につくりあげた桐島杏樹の面立ち。

その桜色の唇が浮かべる笑みは、あどけなく涼やかなのだけれど、底なしにあやしくもあり。

とくん、と、制服の胸の奥で心音が跳ねる。

「——本気の話なの？　あれ」  
とぼけるのは、断念した。

プリントの束をとん、とテーブル——テーブルと呼んではいるけれど、旧い灰色の事務机を四つ固め置きした生徒会室の備品だ——に揃え置いて、未森はため息をついてみせる。

半月ほど前に、杏樹からもちかけられたあの話。

最初にきいたときにはすこしこう、杏樹の正気というものを疑つたし……この数日杏樹が口にしなかつたのでやっぱりあれは冗談だったのかな、と思いかけていたところだったのだ。

「ええっ？ やだなあ。ボクがそんな、本気以外で言うって思った？」

肩をすくめて、杏樹はおどけた苦笑を受かべてみせた。すこし弛んだ笑みをひとしきり唇にたゆたわせて、それから生徒会長は、その唇を真面目に引き結んだ。

「本気も本気だよ。実際、未森に言うよりずっと前から考えてたからね。」

「どうかな。未森は——嫌？」

長く長い長い溜めを挟んで、杏樹は問う。

未森は思わず、身をすくめた。

灰色の事務机ふたつ越しに、杏樹のまなざしが静かに、まっすぐに見すえてくる。

「いや——嫌とか、そういう次元じゃなくって。どう考えてもおかしいでしょ……」

声のトーンを乱して、未森は制服の細い肩をせりあげた。

心臓のリズムが早まって、送り出された血の熱が頬のあたりに集まってゆく気がする。

「学校だよ？ そんなこととして見つかっちゃったら——」

「言ったじゃん。絶対に見つかからないよ」

涼しげなのだけれど、擬音にすると「くすり」と「にんまり」が混ざったような笑みが杏樹の唇に浮かぶ。

「見つかつたら困ることだったら、今までだつてしてきてるって思わない？」

「初めてキスしたのだつて学校だったしき。初めて——」

「わああああっ」

叫び声の抑揚が乱れた。

思わず周りを見回してしまいが、そこに關してはだいたいじょうぶ。生徒会室には私たちふたりだけだし、周りの部屋にも誰もいない。いまの杏樹の言葉は、私のほかの誰にも聞こえてはいない。

雨の音と、すこし荒くなった自分の息の音だけが午後遅くの生徒会室に響く。

ひとに聞かれてはいないというのはだいたいじょうぶなのだけれど……未森は頬を急速に火照らせ、きつとした抗議のまなざしで杏樹をにらんだ。

そう。

桐島 杏樹とは……彼女とは幼馴染や生徒会の会長副会長というのみの関わりではなく——いわゆるプラトニックな関係というでもない。

はじめて口づけを交わしたのは、互いの想いを告げあったこの生徒会室であつたし。校舎の人のいない場所と時間に、それ以上の行為に及んだことも、幾度か——幾度、も、

いや、いやいやいや、でも、だけど！

今回ののは、いままでのとはまたなにか、度合いが違っている、気がして。

「さつきも言ったけど、見つからないよ」

窓向こうの雨空を背に、杏樹が癖のある短めの髪をかきあげた。

淡い逆光のなかで陰になる、あどけない杏樹の相貌。けれどもその陰の中で、こちらを見つめて細められたまなざしは微熱の光を帯びて。

「今日は先生は日直の金崎先生かねさきしかいないし、校内見回りは三時だからもう過ぎてる。

お盆だから部活ものきなみ休みだし、来てる生徒はボクくらい。

夕方からの警備さんがきて校内を見回るのは五時過ぎだから、今はちょうど隙間の時間だよ。行くなら、このタイミング」

笑みとともに、「三時」「五時」のかたちで指を立てながら懇切丁寧な解説口調で紡がれる言葉。

こちらを安心させるような朗らかな物言いでありながら……それでいて。ひとつひとつ、チェスの駒を進めるのにも似て、いたずらっぽくこちらの退路を塞ぎにかかってくる。

「何か別に、するわけじゃないって言ったじゃん。ボクは未森と、ふたりに屋上で過ごしたいってだけでさ」

「いや——だって、なにもないっていったって——」

声をうわずらせて、未森は立ちあがった。

向かいの窓、杏樹の向こう側、頭のうえあたりに自分の顔が映る。

ガラスに淡く浮かんだ像でも、眼鏡の下の自分の頬は真っ赤に火照ほてっているのはわかる。

報淑中学校2年2組、藍川 未森。おさげに結んだ髪と地味めなフレームの眼鏡。校則順守で真面目がとりの生徒会副会長——というふうには、クラスメイトの間でも、先生たちにもいちおう認識されてはいるはずだ。

誰も思っていないだろう。私と、下級生の異性同性両方に人気のある凜とした生徒会長の桐島 杏樹が、いまから人いない校舎でそんなことをしようと思っているなんて。

制服の、夏服のブラウスのなか。夕暮れ近いとはいえ夏の雨の蒸し暑さで、肌着はしつとりと汗ばんでいる。さらにその肌着に包まれたなだらかな胸のなかで、とくん、とくんとリズムが早まりはじめ、て。

正面の杏樹が、椅子から立ちあがった。

ゆるやかな、まるで紐がほどけるような所作しよせ。

こちらを見おろす涼しく甘い微笑から、未森は悟る。悟れてしまふ。

対局めいたこの会話にもう、逃れられないチェックメイトがかかっている。

半月前に杏樹がもちかけてきた、耳を疑うような遊戯の誘い。

何言ってるのよばかじやないのっ……！ とそのとき一蹴したはずのそれは、いつのまにか自分の奥底に芽ぶいて、根をはつて。

この数日、私は実は、待って、望んでしまっていたのかもしれない。

——今日とか、するにはばつちりじやないかなあ。

という、数分前の杏樹の切り出しを。

「みーもり」

身を乗りだして、卓越しに杏樹がこちらの顔をのぞきこむ。

涼しげで秀麗な生徒会長の桐島 杏樹が、ほかの人間には見せない——私の前だけで見せてくれる、子供のような、無邪気でしたらうっほい笑み。

ああ。

かもしれない、なんかじゃなくて。

たぶん……いや、間違いない。私は、望んでいたのだろう。

これから杏樹とふたりで踏みこむ、禁忌の領域の時間を。

「……………もう——しようがないなあ」

席を立ちながら、肩をすくめてついてみせた溜息は、溜息なのにあからさまな熱を帯びて。

隠せるはずはないのだけど、悔しいのですんなり認めてしまうわけにもいけない。

頬を染める赤みが怒りや恥ずかしさだけではなく……：……：……からの時間への、期待を帯びてのものであることを。

杏樹は、へへ——と嬉しそうに笑んだまま、自分の鼻のあたまを人差し指でさすった。

こちらの張った意地を見透かして、見透かしたうえでさらにと流す幼馴染の少女。

小憎らしさと、勝てないな、という気分と、うらはらの甘い慕情とが頭の中と火照った頬をめぐり——未森はへんてこにしかめた表情で、幼馴染の微笑を見る。

「行こっか。せっかくの天の恵みの雨が、止んじやわないうちにさ」

ガラス窓の向こうを手のひらでさし示しながら、彼女は軽やかな一歩を踏みだした。



お盆の校舎のなかには、本当にひとりの生徒もいなかった。

三階の廊下まであがると、生徒会室と違って窓外に樹の葉もないので、雨音さえも聞こえなくなる。いつもであれば曇天や日没で暗くなれば点つている天井の蛍光灯も、夏季休業中なので消されたままだ。

あるのはただ、静けさと、淡い暗さ。空気そのものは蒸しているのだけれど、視界に入ってくる光景はどこかひんやりと沈んで見えて。

その中に、リノリウムの床を歩む自分たちの、上履きの足音は響く。

「ほんと、降らないうちに夏休み終わっちゃうかと思ったよ。夕立は何度かあったけど、雷鳴ってるんじゃないさすがに屋上は危ないもんね」

すこしおどけた調子で肩をすくめて、杏樹あじぎが足をとめた。

ふたりが見あげる先には長めの階段のつきあたり、踊場の壁の、高い位置にある窓。

踊場をターンした先にはすこし短い階段を経て、屋上への出口扉のある畳四畳ほどのちいさな空間に至る。

「見てよ。もうずっと前から用意してたんだよ？」

紺色の、プールバックめいた巾着袋きんちやくぶくろを杏樹は掲げあげる。

先ほど生徒会室を出る前に、杏樹が自分の更衣ロッカーから取りだした荷物。

「何が入ってるのよ。そんな、ずいぶんふくらんでるけど」

「いろいろだよ。ほら、まずはびしょびしょになっちゃうからバスタオルでしょ。ちゃんと未森のぶんもあるから安心して。

それから、大きめのポリ袋とか、あと、特別に要るものとかもあるしさ」

ごくごくお気楽な口調。生徒会の軽めの仕事のとときとか、あるいはお昼ご飯のお弁当を食べにでもいくときのような。

これから私たちがすることのうしろめたさなんて、まるで感じさせることはない。

「……特別に要るもの？」

雨降りの湿度に負けないくらいにじつとりとまなざしを細めた未森に、

「うん。もうちょっとしたらわかるって」

得意げに片目を閉じて、杏樹は踊るように身を翻した。

屋上出口の、階段室。

鉄扉の前には、体育館なんかで使う折り畳みの椅子がふたつ、壁にもたれる形で置かれている。

「ほら、椅子も前もって運んでおいたんだ。未森がいいよって言ってくれたら、すぐにだって実行したかったから——そんなときになってわざわざ取りにいくのって、もどかしいじゃない？」

あ、椅子はボクが運ぶから、悪いけどこつち持ってよ」

片手で折り畳み椅子の骨組みに腕を通しながら、例の中着袋をこちらに差し出す。

いやおうなしに受け取ると、紐が指に伝える重みは思いのほかにあつて……しゃりつ、という謎の金属音が、底のあたりで響いた。

唇をちいさなへの字に嚙んで、いまいちど未森は杏樹をにらむ。

基本的に、杏樹はずるい。

呑気なようできて、用意周到で。そしてその用意周到の肝心な中身を、ぎりぎりまで相手の私には明かしてくれない。

その、細く綺麗な指のうえでいいように転がされているような気が、いつだつてしてしまう。

——ん？と。

考えてみればどうして杏樹が持っているのかわからない屋上の鍵を挿して扉をあけながら、彼女はこちらを振り返った。

「大丈夫？ 未森………ほんとはまだ、嫌だつたりしな

い？」

自分を見つめる目の中に、ほんのかすかに不安の陰りがよぎるのを、未森は見る。

たぶん、私が唇をへの字にしているのを誤解してのことなのだろう、けれど。

「馬鹿にしないでよ」

制服の肩を大きくすくめ、未森は唇をゆるめて、崩してみせた。

今日初めての逆襲ともいえる、不敵な笑みのかたちに。

「嫌だったらこんなとこまでついてくるはずないでしょ。最初に言われたあの時点で、杏樹のことひっぱたいてるわよ」

言つてやった言葉に、杏樹がばちくりと目を見開き——

——あれ？

ちよつと得意げになっていた自分に、自分の中でツッコミが入る。

待つて。私はなんでこつちから杏樹の誘いに乗つてる側に足を踏み込んでいるのか。

とはいえいままさらもうひっこみはつかない。むつけしげしかめ面を赤く染めて、未森は細い肩をいからせる。

「うんっ」

杏樹は嬉しそうに微笑むと、二つの折りたたみ椅子を腕に

引っかけたまま、屋上の鉄扉を開けた。

水の、雨の匂いがこちら側に流れこんでくる。

杏樹に続いて扉をくぐると、そこは屋上の階段室前、せり出したコンクリートの庇の下。

思ってたよりずっと明るい、というのが、見回して最初に感じたことだった。

雨の降ってる日に屋上にやってくるなんていうのが、考えてもみたらこの中学校がっこうに入って初めてのことだ。

もつとこう、灰色の空と薄暗い風景を想像していたのだけれど――空は灰色というよりくつきりと白く、雨に濡れた緑色の塗装の床も、その空からの光を照り返している。

未森はぐくりとつばを飲みこんだ。

決心はしてきたものの……いまからこんなくつきり白々とした空間で、私は、私たちは。

「ちよつと待つてて」

かたわらの杏樹は変わらぬのんきに、上機嫌でふたつの折りたたみ椅子を壁にもたれさせた。

小豆色のビニール地の座面を手のひらではらつてから、その脇に例の中着袋を置く。

「未森さ、そうはいっても先生が来たらどうするの？ っと思ってるでしょ」

問いに、未森は眉をしかめたままうなずいた。

ぴったり言い当てられたというわけではないけれど、もちろんその心配だつてある。

「そこで、だよ。じゃーん」

言いながら袋から杏樹が取り出したのは、やや太めの鎖と、鍵のついて開いたままの南京錠だった。

未森はまなざしにこめた訝しさを解かなかつた。というか、ひそめた眉の角度をいつそうはねあげた。

どうして、そこでだよ、の答えが鎖と南京錠なのか、まったくわからなかつたので。

けれども。

「見て見てこれ、未森」

言われるまま、杏樹の指し示すままに視線を移して、未森はきよとんと目を見開く。

今出てきた屋上階段室の、くすんだクリーム色のコンクリート外壁。今まで気づきはしなかつた、その壁の上の異物に。

「……なに？ これ」

扉のノブの、ほんの数センチ真横。階段室の外壁のその位置に、太い金属のリングが固定され

て突き出ている。ものすごく大きな銀色のヒートンをねじ込んだような、そんな感じに。



「ボクもわかんないんだ。フェンスの柱にも輪っかがくついているところがあるから、目印の旗とかでも立てるか、運動に使うときに仕切りのロープとかでも張つてたのかもだね。」

まあ、なんなのかなんてのはどうでもいいんだって」

しゃりっ……と金属音を響かせて。杏樹は手にした鎖を巻きつける。その壁のリングと、扉のノブのくびれをぐるりと取り巻いて。

あっ……と、未森は杏樹の意図するところを悟った。

杏樹も、こちらに通じたことがわかったのだろう。二重に巻き付けた鎖の両端を強く引っ張りながら、片目を細めてみせる。

「南京錠、頼んでいい？」

声では応えず、未森は大きめの南京錠——鈍い金色をした真鍮製のそれを、巻かれた鎖に近づけた。

たぶん、ここがいいだろう。ドアノブではなく、壁のリングの側。

南京錠のひらいたUの字の片先を、鎖の二箇所、それからリングの内側の端を通して。かちん、と錠を締めてから、ちいさな鍵を抜きとる。

「ナイス未森。——ようし」

満足げに微笑むと、杏樹は扉のノブをこちらに引っばった。

ガチャガチャごんと音をたてた鉄扉はしかし、ぐるりと巻かれて南京錠で固定された鎖のおかげでほんのわずかしか動かない。

「ほら。」

先生とかが来て開けてもこんな感じになるし、隙間もできないから向こうから鎖は見えない。

でもって、ボクらには鎖が鳴るのが聞こえるからさ。開けようとした先生なり警備さんなりが『扉が壊れてるのかな？』って思つて降りて出直してくるまでに、さきつと片付けて元通りにして逃げちゃえるでしょ？」

ものすごく涼やかな『にんまり』。そうとしか表現できないかたちの表情が、杏樹の顔に浮かぶ。

「……いつ考えたの？ こんな」

数秒をおいて、あきれ気味の吐息とともに未森は問うた。確かに、仕掛けとしては万端だ。杏樹が口にした通りこれで、いきなり人がやってきて目にされてしまうことはないだろう。

この雨の屋上で、これから私たちがすることを。けれどもこう、安心とか感心とかするより前にあつけないと。杏樹のこの、抜けのない用意周到さはなんなのか。

「いつって、未森にさいしょに今日のこと話す前だよ。調べにきて、これだ！　って思つて、チェーンと南京錠も倉庫から探してきたんだ。こういうのは準備が大事だからね。

あれ？　……どうしたの？　未森

「別に」

やや湿度の多めなまなざしを眼鏡のレンズ越しに向けながら、未森は唇をとがらせた。

「生徒会の仕事にももう少しこのひたむきさを向けてくれないものかしらとか、そういうことは思つてないから。ぜんぜん」

「ええー？　ちゃんとしてるつもりだけどなあ、仕事」

少々おどけたふうに苦笑する杏樹。

知つてるわよ、という言葉をも、未森は声には出さずにのみこんだ。

そう。

すこしばかり毒づいてしまつてはみたものの、傍らで見ていてよくよく存じてはいる。桐島 杏樹の、生徒会長としての有能さは。

実務の副会長、旗印の会長という役割は就任して以来の自他ともに認める分担だけ——とかく決まり通り四角四面で物事に対処する私が憎まれ役にならないよう、呑気な、と

きには緩急つけた物腰ですつと盾になつてくれているのは杏樹だ。

幼い頃から隣にいた杏樹と、幼馴染という線を越えた間柄になつたのは……ええい、その、私が、杏樹に惚れたのは、だからこそで、あり。

なんだか自爆気味に頬が火照るのを感じつつ、唇を横一字に結んで未森は杏樹の微笑を見やる。自分が意地を張つて憎まれ口を叩いたこともすべてお見通しにちがいない、柔らかに澄んだ瞳を。

勢いよく鼻で吸いこんだ息に、強い水の匂いが混じつた。

さあ……と静かな音を響かせて、広く明るい屋上に午後  
の雨は降り続く。

でたらめに、心臓が鳴っている。

余計な口をきいてしまった理由のひとつは、その。  
もう、それでもしないと、遮るものはないからで。

これから私たちがはたらく行為。

私の奥底はそれを望んでいて、けれども羞恥に怖気づく自分もいて、けれどもこの籠を外したらとまらなくなつてしま  
いそうで、怖く、て。

その私の奥を、そしらぬふう

に。そしらぬふうでいて、なにかもものぞきこんで見やぶつた

ように。

巾着袋から取り出した大きなポリ袋の口を拡げながら、桐島杏樹はあつげらかんと次の、決定的なひとことを口にした。「さて——じゃあ、ぜんぶ脱いじゃおうよ、服」



『未森とさ。はだかになって、屋上で一緒に並んで椅子に座っておしゃべりして過ごしたいんだよね』

それが。

今日のこの時間に至る、はじまり。

数週間前、夏休みがまだ始まったばかりの午後の生徒会室で、杏樹が突然口にしたひとことなのだ。『——あ、今日じゃないよ？ 晴れてるとなんだかこう、恥ずかしいじゃん。』

雨が降ってる日。夕立みたいにざあざあ降つてるときじゃなくって、しとしと一日中降り続いているような日がいいなあって思う』

生徒会室の窓を開け、その日はかんかん照りで入道雲が高く育った空を仰いで。

杏樹はくるりとこちらにターンすると、啞然としたままの

私に笑顔を向けた。

吹きこむ風が、ゆるく癖のついた短い髪をなびかせる。

細めたまなざしの中に宿り揺れる、まばゆく切なく、澄んだ光。

『そうしたらさ——なんか、世界じゅうでふたりつきりになれてるみたいなの、そんな気持ちになるって思うんだ』

当然のことながら、真つ赤になってわたわたして、怒鳴りつけるといつてもいい勢いで相方に震える指を突きつけた自分だけだ。

思い返してみれば。

『な、なにいつてるのよ！ おかしいんじゃないのっ！？』

『そういうばかなことというのはあとにして、仕事してよ仕事！』

『まったくもう……！ いきなり何を言うのかって思ったら……』

自分の発した言葉を記憶の中からひとつひとつ拾いあげて確認してみるに——怒ったり呆れたりはしつつも、こう、はつきりと「嫌」という拒絶はしていなかった気がする。

なので。

さつきから思っていることだけれど、今日この場に至るこ

とはもう、はじめから決まっていた。桐島 杏樹が最初の一手を指したときから、いまこの時間へのチェックメイトはかかっていたのだろう。

即席の閉鎖空間になった雨の屋上に、ふたりきり。

未森は、目の前の風景を見つめる。

緑のフェンスに囲われた屋上は、体育館よりも幅を狭くして、奥行きをすこし増したくらいのはらばら。いま出てきた階段室の出口は、L字型をしている校舎の角にあつて、自分たち向き合っているのはL字の長いほうの辺だ。

フェンスの向こうには三方とも、ここからだど雨空のほか何も見えない。丘陵のもつとも頂上に建つこの中学校（がっこう）なので、屋上は半径数キロのなかで、通常の人間が立てるいちばん高い場所。

どこからも、この場所の私たちを見とがめられるおそれはない、はず。

日影のミルクのような、灰色とも白ともつかない空から、雨はさらさらと降り続けている。

湿度が触れた頬が、涼しくて、熱い。

すこし顔がのぼせているのは、緊張と、羞恥と、それから、否定したくてもしきれない、興奮が、混ざって

いて。

「どうするー？ 未森」

あつげらんとした声が、戸惑いの渦の外から投げ入れられた。

コンクリートの床に置かれた、四五リットルの半透明ポリ袋。雨音を背にして、袋の口をひらきながら、杏樹が瞳を輝かせる。

「未森が混ざっちゃ嫌って言うならって思つて、いちおう脱いだの入れとく用に袋ふたつ持ってきたんだけどさ。分けて使う？ それとも、めんどくさいからいっしょに入れちゃつていい？」

しゅるり——と首元のリボンを抜きとつて、杏樹は袋の中に放り込む。

こちらの恥ずかしさもためらいもそしらぬふうで、いそいそと自分のブラウスのボタンを外してゆく。きれいな鎖骨のラインとくぼみが、あらわになった。

「……一緒でいいわよ、別にそんなの」

とがらせた唇から、とがらせた息混じりに言葉を吐いて。眼鏡越しのとがらせた上目遣いで、目の前の相方をにらむ。

「つていうより——もうちよつとこう、なんかなの……？」

「へ？ なんかつて？」

こいつはきよとんと目を見開いた。

見開いたのか、見開いてみせた（傍点）のか。わかつているのか、いないのか。

「はだかになるんだよ？ 私たち、こんなとこで」

いつもの倍くらい広々とひらけてみえる屋上を、未森はひろげたてのひらで示す。

「それはわかっているよ。ボクが言いだしたんだもの」

効果はない。やはりのほほんとした涼やかな笑みを浮かべたまま、杏樹は首を傾げた。

その間にも白く細い指は、制服の白いブラウスのボタンを外してゆく。幾度か目にしたことのある、白と淡い水色のストライプのスポーツブラが、ゆるやかに腹筋の浮いたスレンダーなお腹が、目の前にあらわになった。

「ふたりではだかになったことなんてたくさんあるじゃん。

お風呂やさんとかでだって——

……あと、ボクや未森の部屋でだってさ」

言葉の前半と後半で、杏樹の笑みと声のトーンは微妙に変わる。のんきですこやかな調子から、あやうげな悪戯いたずらっぽさをはらんだものへと。

「ほら、脱いじゃお脱いじゃお。もしかして、ボクが脱がしちゃったほうがいい？ 未森の服」

「そういうところだってば！」

無造作に伸ばされた杏樹の両手を、一步後ろに跳んで未森はかわす。

「言っておくけれど、ここまでできたのだから、いまさら嫌。つていつているわけじゃないのよさつきも言ったと思うけど、つ、

もうすこし、こう、なんなの、雰囲気、つていうか、」

もはや何に自分がこんな顔を真っ赤にしているのかもわからないまま、未森はしどろもどろに口ごもった。

「こんな、どきどきしてるのに、杏樹、ふつうで、ずるいつていうか」

ブラウスの、リボンの下のあたりを指でぎゅっと握りしめて、うつむいて、唇をへんてこに尖らせて。

未森はもう、半ば自分が何を言っているのかもわからないまま、眼鏡のレンズ越しの上目遣いに杏樹を睨む。

え？ と杏樹は一瞬虚を突かれたような表情になって——

「なあんだ」

それから、ゆるやかな溜息とともに口元をゆるめた。

羽織っただけになっていたブラウスを、ふわり軽やかに袋に放り込むと、そのまま片手をこちらに伸ばす。

「えっ——」

「やだなあ、未森」

手首をつかまれて声をあげた未森に、いたずらっぽく笑いかけながら。

「さつきからボクが、どきどきしていないなんて思った？ほら」

あつけらかんとした、けれども微熱の潜んだ囁き。

ぴとん、と。

杏樹に引き寄せられた手が、手のひらが杏樹の肌にくっつく。

ミントブルーのスポーツブラと、それは被う左胸のちようど半々のところに。

最初に感じたのは、ひんやりとした涼しさ。

それから、遅れて滲むように伝わってくる、杏樹の肌の内側の温もりと、熱と、かすかな汗の湿りけ。

とくん、とくんつ、と響きがあった。

けれども、それが杏樹の言う杏樹の心臓のどきどきなのかはわからない。

同じくらいに未森の心臓は跳ね、その脈流は全身に、杏樹の胸にあてた手のひらと指にも伝播でんぱしていて。

降り続く雨音のなかに響く鼓動が、私たちのどちらのものなのかもわからない。

世界全体が、とくんととくんと震えているみたい。

杏樹が、にっこりとはにかんだ。

つむったように細めた目だけれど、かすかな瞼まぶたの間からまなざしは未森を見つめていて。唇が刻む笑いと相まって、ぞくりとするほどあでやかな杏樹の表情。

その笑みのまま、杏樹は未森の手のうえに、自分の手のひらを重ねる。

手首を握っているほうの指は離されたけれど、未森はもう自分の手を引きぬいて引っこめることはできない。

できないというより、自然と、しない。

杏樹の胸と手のひらでサンドイッチされた指が、数秒で熱っぽく汗ばむ。

自在になった片手を、杏樹はこちらに、未森の襟元に伸ばした。

さしこまれた人さし指が、未森の制服の臙脂色えんじいろのリボンを持ちあげる。

「リボンだけ、ボクがほどこいて抜いていいかな」

未森は答えなかった。声では。

答えなかったけれど、その沈黙は拒否ではない。

杏樹にもそれは、まちがいはなく伝わっている。

結び目に細い指先が挿れられて——ほんの数秒で、片手だけで、ほどこかれてゆく。

まるで手品のような、なめらかな杏樹の指使い。

はらりと散って、襟にかかっているだけになったリボンの生地。その逆さUの字の片側の端を、杏樹の指が優しく握る。

まなざしが、正面から合った。

言葉はなく、そして仕草もない。けれどもその一秒のなかに、互いに無言無動のまま、杏樹の「いい？」という問いかけと、私の首肯が確かに存在した。